

館 列 陳 品 商 濱 爾 哈  
ト ツ レ フ ン ハ

情 事 線 沿 及 道 鐵 克 齊  
( 編 下 )

月 二 年 六 和 昭  
號 三 拾 五 百 一 第

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8 0 1 2 3 4 5

始



### 露滿蒙通信刊行會規定

- 一、本會は歐露、西比利亞及滿蒙の財政、經濟、金融その他一般事情を調査通信するを目的とします
- 一、本會は左の刊行物を發行します
  - (イ) 露亞 時報—露滿蒙地方の財政經濟その他一般事情の記事があります (月刊雜誌)
  - (ロ) ハンフレット—同上記事を三十頁乃至百頁に一纏めにしたる單行書であります (月刊)
  - (ハ) 週報—週内哈爾濱地方に起りたる出來事を簡報し讀者の質問に供するのであります (週刊謄寫版)
- 一、本會は哈爾濱商品陳列館内に設けてあります
- 一、會員は一ヶ年拾貳圓の會費を前納しまして前記諸刊行物を受納するのであります

北滿洲哈爾濱道斜紋街商品陳列館内

### 露滿蒙通信刊行會

### 哈爾濱商品陳列館

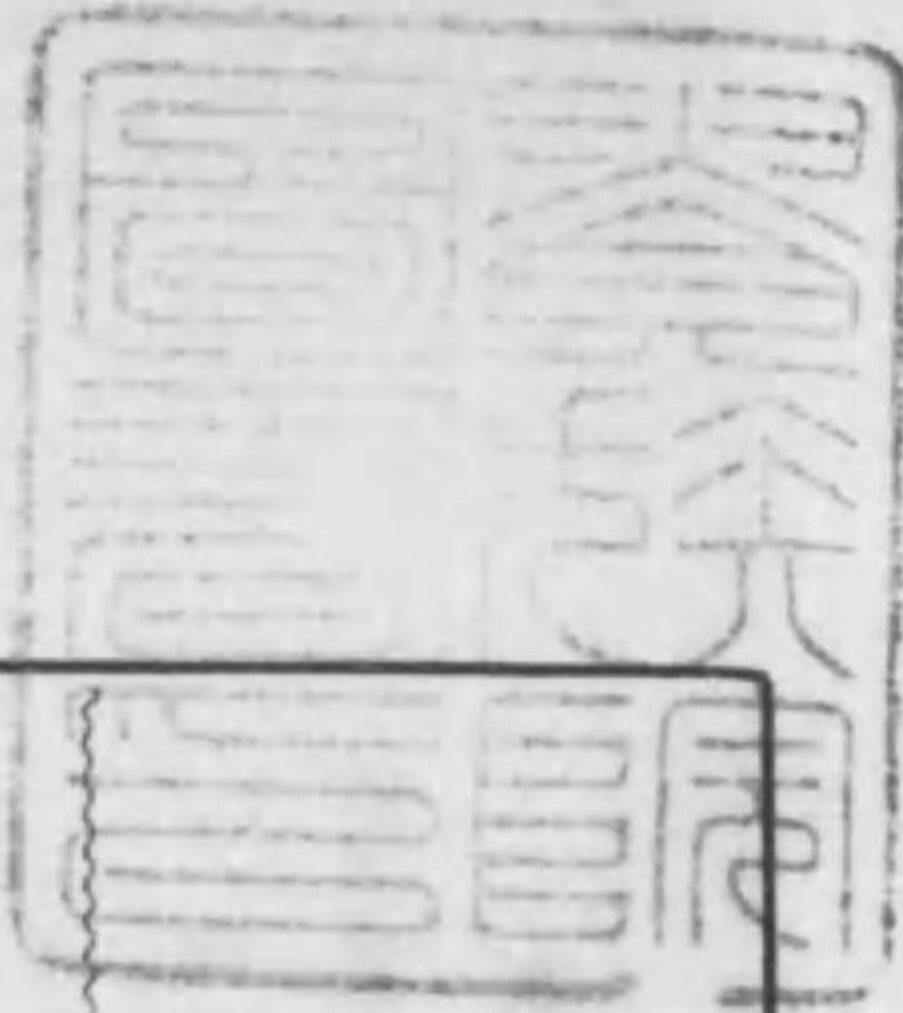
### パンフレット第百五拾二號

### 齊克鐵道及沿線事情 (下編)

北滿鐵道の稱ある地方に向け敷設されつゝある新線であり、其地方將來の發展が著目なれば、且つ其莫大なる變類が事態によるや、形勢が著しく變遷し、其影響は、沿線に於ける問題であるのみならず、延ては東俄南滿鐵道の建設、乃至大連の發展に及ぼすものである。即ち館員柏本省吾は是迄踏査せしめたる所を、上掲事項を、詳述す。

昭和六年二月十五日

森 御 蔭



### 露滿蒙通信刊行會規定

本會は歐羅巴、西比利亞及滿蒙の財政、經濟、金融その他一般事情を調査通信するを目的とし、

本會は左の刊行物を發行します。

(イ) 週報 時報 露滿蒙地方の財政經濟その他一般事情の記事があります。毎月刊行。

(ロ) パンフレット 刊行記事を三十頁乃至百頁に一編めにしたる單行本であります。

(ハ) 週報 露滿蒙地方に起りたる出来事を調査し、その真相を以て之を刊行する。

（月刊）

本會は歐羅巴露滿蒙地方の内に設けられ、

本會は一ヶ年毎にその内容を調査し、その結果を以て之を刊行する。

北滿洲哈爾濱州直隸州財政調查會

### 露滿蒙通信刊行會

### 哈爾濱商品陳列館

### パンフレット第百五拾三號

### 齊克鐵道及沿線事情 (下編)

北滿穀倉の稱ある地方に向け敷設されつゝ、ある新線であるだけに其地方將來の發展が囁目されて居る。且つ其莫大なる穀類が東鐵による支那側が將た滿鐵線に吸收されるかは誠に興味ある問題であるのみならず、延ては東鐵南部線の運賃政策にも影響を招致すべき重大意義を有する鐵道である。即ち館員柏木省吾を差遣調査せしめたる所以であり、上梓頒布する所以である。

昭和六年二月十五日

森 御 蔭

## 例言

### 度量衡並に官吊相場

本編中に記載せる度量衡は左の如き換算に依る。

一响＝七段四二(日)四十五响＝廿一支里、一井子＝六方支里。

一石＝大豆約十四布度、一米屯＝約四石

因みに黒龍江省官吊の相場は左の如くである。

昭和五年一月(平均)	哈大洋一元 <small>＝</small> 三一八、八九 <small>吊</small>
同 二月(同)	同 三四五、五三
同 三月(同)	同 三八六、五四
同 四月(同)	同 四〇三、九七
同 五月(同)	同 四四三、〇八

# 齊克鐵道及沿線事情

## 目 錄

第一章 接讓地帶概觀	一
一、面積	一
二、人口	三
三、農作物作付面積	四
四、農作物收穫高	八
五、家畜	九
六、穀物剩餘高	一一
第二章 接讓地帶移民概況	一二
第三章 接讓地帶開墾の 歷史的沿革	一六

(下編)

## 第四章 各縣開發狀況

一、龍江縣	一八
二、林甸縣	二〇
三、依安縣	二二
四、拜泉縣	二三
五、克東設置局	二五
六、德都設置局	二五
七、克山縣	二六
八、龍鎮縣	三〇
九、訥河縣	三二
一〇、嫩江縣	三四



本館中二冊... 三〇八  
三〇三、次子  
三八六、五國  
三三三、五三  
三二八、八次

一、布西設置局	三五
二、甘南設置局	三七
第五章 背後地商業事情	四〇
一、概 説	四〇
一、都 邑	四〇
二、需要商品の種類	四一
三、仕入地	四四
四、移輸入數量	四五
二、齊々哈爾	五四
一、輸入市場としての齊々哈爾五六	
三、拉哈站	六〇
四、泰安鎮	六一
五、克山縣城	六二

六、二克山	六四
七、拜泉縣	六五
八、德都鎮	六六
九、訥河縣城	六七
一〇、嫩江縣城	六八
一一、希西縣城	六九
一二、甘南縣城	七一
一三、東陽鎮	七一
一四、結 言	七二

## 齊克鐵道及沿線事情 (下編)

### 第一章 接讓地帯概観

鐵道及沿線各驛の狀況に就ては、前編に於て之を詳細に述べたるに就き、本編に於ては接讓地帯各縣に於ける農業と土地の開発狀態を述べ、併せて各地の商業事情を附記して、本鐵道との關係を明らかにすることとする。

#### (一) 面 積

本鐵道の接讓地帯を爲す地方は既に前編に於て述べた通り

- 一、南部 龍江縣、林甸縣、依安縣
- 二、東部 拜泉縣、克東設置局
- 三、北部 克山縣、龍鎮縣、德都設置局
- 四、西部 訥河縣、嫩江縣、布西設置局、甘南設置局

の諸縣であるが、其の包有する面積は合計一〇、一九四平方里、一五八、五五三、七五〇反に達して居る。今其の内譯を示せば左の如くである。

- 一、總面積 一〇、一九四平方里、一五八、五五三、七五〇反
- 二、可耕地 四二、七二九、三三〇反  
     既耕地 一一、一四一、五六〇反  
     未耕地 三一、五八七、七七〇反
- 三、不可耕地 一一五、八〇七、七七〇反

今之を百分比を以つて示せば次の如くなる。

一、總面積に對する比率

- イ、可耕地 四七、九%
- ロ、不可耕地 五二、一%
- ハ、既耕地 一九、八%
- ニ、未耕地 二八、一%
- 二、可耕地に對する比率
- イ、既耕地 三三、三%

ロ、未耕地 六六、七%

(二) 人口

南方支那の動亂と産業不振の結果、北滿洲方面に流入する移民の數は近年屯に増加し、本鐵道沿線地方へも年々五萬人以上の移民が到來し、各々開墾に従事しつつあるが、最近に於ける接讓地方各縣の人口は左の如くである。

縣名	人口	總面積一平方里ニ對スル人口密度	既耕地一平方里ニ對スル人口密度
龍江縣	二五二、八二〇	三八四	一、八七三
林甸縣	七五、六八〇	三八〇	一、二六一
依安縣	六八、三七〇	二八〇	一、五一カ
拜泉縣	三五九、七九〇	一、一八四	一、七三八
克東設置局	二八九、二一〇	七七五	一、九九五
克山設置局	二八九、二一〇	七七五	一、九九五
龍鎮縣	五三、〇三〇	五六	四、四一九

訥河縣	一、二二、一六〇	二六一	一、五五八
嫩江縣	六五、三八〇	一九	二、七二四
布西設置局	三九、五九〇	一二	四、三九九
甘南設置局	二五、五九〇	九三	三、一九九
合計	一、三四一、六二〇	(平均) 三四四、四	(平均) 二、四六八、五

(三) 農作物作付面積

本鐵道接讓地帯各縣の農業は、鐵道敷設と山東移民の流入、及び支那側當局の開墾企畫等に依り、著しく其の開拓は進捗して居る。今各縣の農作物作付面積を示せば左の如くである。

イ、接讓各縣農作物作付面積表(單位日本反)

縣名	大豆	其他豆	高粱	粟	玉蜀黍	小麥	其他雜穀	計
龍江縣	七四、七八〇	二〇、九四〇	二五九、四〇〇	二七二、三三〇	三二、五二〇	四七二、八六〇	二二二、四〇〇	二、〇九四、〇一〇
林甸縣	三八八、八二〇	二七、七七〇	一四八、二二〇	五四、六〇〇	三七、〇三〇	五八、三三〇	一一、一〇〇	八二五、七六〇

依安縣	三二五、六三〇	七、〇一〇	七六、六二〇	一三六、九八〇	一四、〇三〇	一〇八、七二〇	四二、四一〇	七二〇、四一〇
拜泉縣	一、三七八、八四〇	三三、〇四〇	三八四、五一〇	六四〇、八六〇	四八、〇六〇	五四四、七三〇	一七六、二四〇	三、一〇二、二〇〇
克東設置局	一、二四、八〇〇	四四、九九〇	一六二、四八〇	二二四、九六〇	四六、九九〇	四四九、九二〇	一九七、四五〇	二、二四九、九九〇
克山縣	五三、五二〇	一、六六〇	一六、〇六〇	三〇、三三〇	五、三五〇	三九、二五〇	三二、二四〇	一七八、四一〇
龍江縣	三一九、七〇〇	二二、三四〇	八九、三六〇	二四五、七三〇	二二、三四〇	二三四、六二〇	一八二、八八〇	一、二六、九七〇
訥河縣	一八、六四〇	七五〇	三、七二〇	七〇、八五〇	五、九九〇	一四九、一五〇	一二四、一六〇	三七二、八七〇
嫩江縣	二九、〇八〇	九〇〇	八、七二〇	一七、四五〇	五、八二〇	二二、八一〇	六一、六二〇	一四五、四〇〇
布西設置局	一七、五〇〇	二、〇一〇	六、八九〇	三、七八〇	四、五九〇	一八、三七〇	五一、六六〇	一〇四、八一〇
甘南設置局	四、四一〇、五二〇	一六〇、四二〇	一、二五五、九〇〇	一、六九七、七六〇	二二九、二二〇	二、〇九七、七五〇	一、二四二、一六〇	一、九三三、五〇〇
合計	一、三二五、六三〇	一、〇一〇、〇一〇	一、〇一〇、〇一〇	一、〇一〇、〇一〇	一、〇一〇、〇一〇	一、〇一〇、〇一〇	一、〇一〇、〇一〇	一、〇一〇、〇一〇

因みに各縣の總面積、可耕地、不可耕地並に既耕地、未耕地の割合は左の如くである。

ロ、接讓各縣農耕地面積表



縣名	總面積		可耕地		不可耕地
	方里	反	既耕地	未耕地	
龍江縣	六五八	一〇,二三三,三三〇	二,二〇一,六九〇 <sub>反</sub>	一,五〇六,三七〇 <sub>反</sub>	三,六〇八,〇六〇 <sub>反</sub>
林甸縣	一九九	三,〇九四,八五〇	九二八,六六〇	五七九,八八〇	一,五〇八,五四〇
依安縣	二四四	三,七九四,六九〇	七〇二,一一〇	一,九五六,二八〇	二,六五六,三九〇
拜泉縣	三〇四	四,七七七,八一〇	三,二八,二七〇	四二〇,九〇〇	三,六三九,一七〇
克東設置局	三七三	五,八〇〇,九〇〇	二,二五六,七四〇	二,一四〇,三四〇	四,三九七,〇八〇
克山縣	九五一	一四,七八九,九五〇	一七八,八六〇	七,三七九,四二〇	七,五五八,二七〇
龍鎮縣	四三〇	六,六八七,三六〇	一,二七七,七〇〇	二,五三三,五九〇	三,六五一,三〇〇
訥河縣	三,四三三	五三,七〇一,〇六〇	三七二,八二〇	八,〇五五,三六〇	八,四二九,一八〇
嫩江縣	三,四〇七	五二,四二〇,四六〇	一四九,六六〇	五,四二一,九六〇	五,五六七,六二〇
布西設置局	二七五	四,二七六,八〇〇	一一七,〇四〇	一,五九三,六八〇	一,七一〇,七二〇
甘南設置局	一〇,一九四	一五八,五五三,七五〇	一一,二四一,五六〇	三一,五八七,七七〇	四二,七二九,三二〇
合計					

更に之を見安くする爲め百分比を以つて示せば次の如くである。

ハ、接讓各縣可耕地、不可耕地、既耕地、未耕地百分比表

縣名	總面積ニ對スル比率(%)				可耕地ニ對スル比率(%)	
	可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地
龍江縣	三五、三%	六四、七%	二〇、五%	一四、八%	五八、二%	四一、八%
林甸縣	四八、七	五一、三	三〇、〇	一八、七	六一、六	三八、四
依安縣	七〇、一	二九、九	一八、五	五一、六	二六、四	七三、六
拜泉縣	七七、〇	二三、〇	六八、一	八、九	八八、四	一一、六
克東設置局	七五、八	二四、二	三八、九	三六、九	五一、三	四八、七
克山縣	五二、一	四八、九	一一、二	四九、九	二、四	九七、六
龍鎮縣	五四、六	四四、四	一六、七	三七、九	三〇、六	六九、四
訥河縣	一五、七	八四、三	〇、七	一五、〇	四、四	九五、六
嫩江縣	一〇、八	八九、二	〇、三	一〇、五	二、六	九七、四
布西縣						

甘南縣	四〇、〇	六〇、〇	二、七	三七、三	六、八	九三、二
平均	四七、九	五二、一	一九、八	二八、一	三三、三	六六、七

即總面積に對し可耕地は平均四七、九%、之に及し不可耕地は五二、一%で可耕地よりも稍多  
い。既耕地は可耕地總面積に對し三三、三%で、未耕地の六六、七%に比すれば遙かに尠い。

(四) 農作物收穫高

接讓各縣に栽培せられる主要穀物は上述の如く、大豆、小麥、高粱、粟、玉蜀黍及其他の雜穀  
であるが、大豆最も多く次に粟、小麥、高粱の順序である。今其の收穫高を見るに左の如くである

農作物收穫高 (單位日本石)

縣名	大豆	其他豆	高粱	粟	玉蜀黍	小麥	其他雜穀	計
龍江縣	七〇、〇五〇	一一、一五〇	二六、一八〇	三三、〇七〇	四〇、八三〇	三五九、三七〇	三〇一、七六〇	二、〇二六、六一〇
林甸縣	三五、二八三	一六、一一〇	一五、二、五六〇	一九三、二六〇	四八、一四〇	四四、三二	一一七、七六〇	九三、九九七〇
依安縣	二八七、三三〇	四、〇七〇	七八、九三〇	一七一、三三〇	一八、二四〇	八二、六三〇	四八、七七〇	六九一、〇八〇

縣名	大豆	其他豆	高粱	粟	玉蜀黍	小麥	其他雜穀	計
拜泉縣	一、二五三、八二〇	一八、五八〇	三九六、〇九〇	八〇、〇七〇	六二、四八〇	四一三、九九〇	二〇二、六八〇	三、一四八、六八〇
克東設置局	一、〇三三、七〇	二六、〇九〇	一六七、三五〇	二八一、二〇〇	五八、四九〇	三四一、九四〇	二二七、〇七〇	二、一五、七一〇
德都設置局	四八、七〇〇	九六〇	一六、五四〇	三七、九一〇	六、九五〇	二九、八三〇	三七、〇八〇	一七七、九七〇
龍鎮縣	二九〇、九三〇	一一、九六〇	九二、〇五〇	三〇七、一六〇	二九、〇四〇	一七八、三二〇	一一〇、三二〇	一、一〇、七五〇
訥河縣	一六、九六〇	四四〇	三、八四〇	八八、五六〇	七、二七〇	一一三、三五〇	一四二、七八〇	三七三、二〇〇
嫩江縣	二六、四六〇	五二〇	八、九八〇	二一、八一〇	七、五七〇	一六、五八〇	七〇、八六〇	一五二、七八〇
布西設置局	一五、九三〇	一一、一七〇	七、一〇〇	一七、二二〇	五、九七〇	一三、九六〇	五九、四一〇	一一〇、七六〇
甘南設置局	四、〇三三、四八〇	九三、〇五〇	一、一九〇、五七〇	二、二九、六七〇	二八四、九八〇	一、五九四、二八〇	一、四二八、四八〇	一〇、八七三、五二〇
合計								

(五) 家畜

農業の副産物と最も重大なる意義を有する接讓各縣の家畜を見るに、最も多きは馬で、主として農耕に使用され、冬期は特産物の輸送に利用して居る。今各家畜の保有量を見ると左の如くである。

種類別家畜數

縣名	牛	馬	騾	驢	羊	豚	計
龍江縣	50,100	42,900	7,400	3,400	31,100	145,200	271,400
林甸縣	9,800	18,280	2,400	1,400	10,500	29,400	71,780
依安縣	15,800	33,600	2,400	900	5,900	32,900	80,500
拜泉縣	49,300	73,900	12,400	2,300	22,700	180,000	339,600
克東設置局	23,580	40,600	7,700	1,900	20,800	78,300	172,880
克山縣							
龍鎮縣	6,900	9,000	900	100	5,800	15,100	37,900
德都設置局	21,800	40,260	6,300	1,600	2,300	21,400	114,690
訥河縣	15,300	19,840	1,900	400	1,500	22,800	60,740
嫩江縣	8,900	10,650	300	200	2,800	15,500	38,350
布西設置局	5,800	6,150	200	100	3,000	11,000	37,350
甘南設置局	197,380	284,280	41,910	22,300	116,400	572,800	1,225,090
合計							

(六) 穀物剩餘高

地方の經濟生活と最も密接なる關係を有するは、穀物輸出の盛衰であるが、本年の如く各地市場の閉塞並に銀安に伴ふ通貨の慘落は、地方農民の購買力に甚だしく悪影響を及ぼして居る。本鐵道接讓地帯の穀物は、鐵道敷設前は主として呼海鐵道と馬車輸送に依つて安達方面に出廻り、齊々哈爾、昂々溪方面に出廻るものは比較的少なかつたが、近時支那側の自國鐵道繁榮策奏効し、接讓地帯の穀物は概ね本鐵道に集中せられるやうになつた。

今之等接讓地方より産出する穀物の輸移出可能量を推定すると大体左の如くである。

イ、食料 人口一、三四一、六二〇人に對し 約四、四〇〇、〇〇〇石

ロ、飼料 家畜一、二二五、〇九〇頭に對し 約二、一〇〇、〇〇〇石

合計 消費高 約六、五〇〇、〇〇〇石

ハ、穀物總生産高 約一〇、八〇〇、〇〇〇石

差引殘高 約四、三〇〇、〇〇〇石

平均七、九石にて換算 約五五〇、〇〇〇キロ屯

## 第二章 接讓地帯移民概況

黒龍江省に於ける主要移民通路は

- (一) 哈爾濱より呼蘭、綏化、海倫を経て通北、龍門鎮、嫩江に至るもの
- (二) 安達站より安達、明水、拜泉を経て克山に出で夫より三方面に分れ、訥河、嫩江、齊々哈爾に至るもの

(三) 昂々溪より齊々哈爾を経て訥河、嫩江に至るもの  
 の三路を普通とし、植民乃至開拓の順序は年代よりすれば、(一)路(三)路(二)路の順に依り行はれ、地味よりすれば一等地より二、三等地に進み、地域別に見れば南方より漸次北方に延びつつある。

又開墾地の多いのは(一)路(二)路で(三)路は地味良好なる地方の少い爲め既墾地最も少く、概して右移民通路の兩側二十哩、三十哩以内は一等地は概ね開墾され盡し、二等地以下と雖ども、南部地方に於ては各通路の兩側二、三十哩以内は殆んど開拓され盡し、其の程度は

南より北進するに従つて、漸次稀薄となり綏化、海倫、蘭西、望奎、青崗、安達地方は可耕地は殆んど開墾され盡して居る。目下開墾されつつあるは、右通路の兩側三四十哩外にして、就中最も移民の盛んに流入しつゝある地方は通北、龍門鎮、(二)路に在つては克山の北部(克山を去る一二〇支里以北の地)及西部泰安地方(三)路に在つては訥河、嫩江甘南地方である。因みに此等の地方に於ける黒土は地方に依つて二尺乃至三尺の層を爲し、農民の語る所に低れば黒土質處女地に在つては、三四十年間は肥料を施すことなくして耕作し得ると稱して居る。今之等地方の移民の分布状態に付いて見るに、東支鐵道西部線各驛の旅客發着數に依つて、其の數を算定することが出来る、左表中増とあるは着驛旅客數が、發驛旅客數より多數なる場合を示し、減とあるは其の反對である。(單位千人)

東支西部線 驛名	着旅客數				發旅客數				増又は減	
	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年		
滿洲里	一六、六	二二、七	二五、三	二二、三	二二、五	三二、一	増五、三	減〇、八	減五、九	

札	海	布	札	張	富	昂	小	安	宋	滿	對	米	其	合
賽	拉	哈	蘭	子	拉	々	蒿	達		洲	青	太	他	計
爾	爾	爾	屯	山	爾	溪	子			滿	山	子	縣	
四、四	一七、七	五、七	二五、八	四、七	一七、五	六七、四	一八、七	一四六、八	一七、八	一〇、四	三〇、〇	一五、八	三三、六	五〇〇、九
八、六	二〇、八	九、九	九、一	七、六	二五、一	一〇五、三	三四、〇	二〇三、七	二〇、五	一一、四	三八、六	二〇、四	五四、〇	七〇〇、八
一九、九	二四、七	一一、九	二、四	一〇、五	三二、六	一三四、八	四五、三	二〇六、二	二二、一	一三七、七	四八、六	四六、五	八〇、五	八五九、〇
五、六	一六、一	五、七	四、六	三、九	一三、三	六三、六	一六、六	一三一、七	一八、三	一〇〇、一	三二、五	一五、三	三三、八	四七三、九
一一、一	一八、五	九、一	七、二	六、〇	二一、八	九一、五	二九、五	一七二、四	二〇、六	一五、一	四一、九	二二、八	四八、一	六四三、一
一五、二	二四、〇	一一、九	九、四	七、九	三〇、七	一二六、一	三九、六	一八六、八	二二、八	一三三、一	三三、五	五二、七	九八、一	八二五、〇
減一、二	增一、六		增一、二	增〇、八	增四、二	增三、八	增二、一	增一五、一	減〇、五	增〇、八	減二、五	減一、五	減一、二	增二七、〇
減二、五	增二、三	增〇、八	增二、〇	增一、六	增三、三	增九、八	增四、五	增三、三	減〇、一	增六、三	減三、三	減三、四	增五、九	增五七、七
增四、七	增〇、七		增三、〇	增二、六	增一、九	增八、七	增五、七	增一九、四	減〇、七	增四、六	增一、一	減六、二	減一七、六	增二四、〇

右掲の表に明らかなるが如く、西部線に於ける移住に依る人口の増加は一九二六年二万七千人、一九二七年五萬七千七百人、一九二八年三萬四千人となつて居るが、實際に於ては右の東支鐵道便に依つたものの外に、馬車輸送又は徒歩及洗昂線に依つて、北上したるものも随分多いのであるから、東支鐵道調査課の發表した、一九二七年度西部線方面向移住民八萬人と言ふ數字は餘りに勢きに失するの感がある。

一九二八年西部線及呼海線方面向移民の激減は、第一に北滿全般の移民運動が減退したのと一九二七年是等地方へ大衆群をなして押寄せた移民が一時に増大した爲め其の成績面白からず、大部分は東部線方面へ方向轉換を行つた爲めである。而して西部線各驛の移民状態に就て見るに、最も多く移民を吸集して居るのは安達、小蒿子、昂々溪等の各驛で、殊に最も面白い現象を呈して居るのは張山子、札蘭屯等の齊々哈爾以北の興安嶺山麓地方で、是等の地方へは從來移民は向はなかつたものであるが、最近三、四年來其の徴候を認め、年々其の傾向は顯著となりつつある。即ち一九二六年札蘭屯方面に移住した移民數は僅かに千二百人程度に過ぎなかつたのであるが、一九二八年には三千人以上に及んで居る。

因みに北滿全般より見たる移民の中心地は、今や東部線方面に移り、東支鐵道輸送統計に依るものみでも、最近左の如き數字を示して居る。一九二六年四万一千四百人、一九二七年九萬八千六百人、一九二八年八万一千四百人。

### 第二章 接讓地帶開墾の歴史的沿革

黒龍江省一帯の地方は、もと、遊牧を生業とする蒙古民族の居住して居つた土地で、齊克鐵道沿線の林甸縣、依安縣地方は、以前蒙古王族杜爾伯特王旗の所有して居つた土地で、拜泉縣克山縣地方も亦従前の奔乃公旗の所有して居つた土地である。従つて黒龍江省には、今尙ほ農業に従事せずして、遊牧、狩獵を業とするダウル（達呼爾）オロチヨン（鄂倫春）ソロン（索倫）オロト（額魯特）等の蒙古族が各地に散在して居る。現在當地方に在つて農耕に従事し、地方開發上幾多の貢獻を爲して居るのは主に漢人で、農耕に適する漢人が自由に當地方に移住するやうになつたのは今から僅か三十年程以前のこと、従つて當地方の開發は極めて最近のこと、農耕發達の沿革は、畢竟移住漢人の土著蒙古人の所有地の侵略史に過ぎない。

政治的には一六八一年、康熙帝の命に依つて、黒龍江畔に愛琿並に呼瑪の兩市が建設されたが、更に一六八四年に至つて黒龍江將軍が任命され、愛琿を首都と定めた、従つて伯都納から嫩江河畔に沿ふ軍道は、黒龍江省と支那本部とを連絡する幹線となつた。次いで一七一〇年に至つて、愛琿、墨爾根、齊々哈爾の三市に副都統が置かれ、更に索倫、達呼爾、鄂倫春、巴爾虎（呼倫貝爾）の四總管が置かれ、此等の地方に通ずる街道の駐屯兵と、各驛站とは遊牧蒙古人の最初の土著地となり、又黒龍江省に於ける農耕の先達となつた。

一七三四年に於ける呼蘭城の建設は、漢人移住の端緒を開いたが、本省の開墾が實際に行はれるやうになつたのは、實に一八三〇年で、哈爾濱の對岸呼蘭河口から巴彥に至るまでの、松花江岸の一部を開放したときに始まつて居る。次いで一九〇〇年、光緒二十九年に至り、漢人の全省蒙古人族内に對する自由移住が許可されたが、此のときに至つて始めて農耕の鎖國時代は完全に破れた。

全省の解放と同時に一九〇〇年東支鐵道の建設は黒龍江省の開發に重大なる影響を及ぼし、露國移民の鐵道沿線移住の盛んになるに伴れ、支那政府も亦八方手段を盡して土地の開發に志

し、一九一四年には黒龍江省招墾規則を實施して移民の勧誘に努め、應募者には種々の特典を與へた。然し乍ら從來東三省は馬賊の聞え高い地で移住民の農耕發展を妨げること甚だしく、其の事業は遅々として進捗しなかつた。

然し乍ら最近秩序の整頓と共に、支那側行政の改善に依り、大部隊の馬賊も漸く其の影を沒し、新移民は數年來土著して成巧せる、舊移民の例に倣つて續々移住し來り、土地の開発は鐵道の敷設と相俟つて稍々見るべきものあるに至つた。

#### 第四章 各縣開發狀況

##### 一、龍江縣

龍江縣は齊々哈爾を中心とする面積六五八方里、一〇、二二三三、二二二〇反の管内を包括し、行政上、省城、甯年站、塔哈爾站、昂々溪及富拉爾吉の五市と其の他の數郷に分れて居る、龍江縣一帶は、最初康熙二十八年副都統を置いて統治せしめたが、同三十八年嫩江(黒爾根)に常住して居つた將軍を、齊々哈爾に移すに及んで、黒龍江省軍政の中心地となり、今日に及んで居るものである。

由來齊々哈爾管内の開拓事業は、清朝以來些の進捗を見ないが其の原因は、附近の土壤が砂土質であり、且つ氣候激甚、加ふるに沖積土として豐饒なる呼裕爾及嫩江流域地方が、殆んど毎年氾濫を逞しくする爲めである、呼裕爾河、嫩江の流域地方の氾濫が、如何に甚だしかつたかは、光緒二年―光緒十二年に至る十年間に於て、副都統の補助を受けぬ年は僅かに光緒六年、光緒十年及同十一年の三年に過ぎなかつたに見ても之を知ることが出来る、(但し光緒二十年―民國六年に至る烏裕爾河の治水工事は、此の方面の水害に對し少からざる貢獻を爲した)。

本縣の面積は六五八方里、一〇、二二三三、二二二〇反で、既耕地二、一〇一、六九〇反齊々哈爾西方の嫩江右岸地方は肥沃地で最も農業に適して居る。

齊々哈爾市場の勢力範圍に入るべき地方は、齊克線が開通した今日に於ては、嫩江流域及以西の大興安嶺山麓地帯は言ふまでもなく、從來安達市場又は呼海線と勢力範圍の錯綜して居つた齊々哈爾の東北地方、即ち林甸、依安、拜泉、龍鉞等の各縣の穀物も當然齊克線に依り齊々哈爾方面に吸集せられるに至るであらう。

本縣の都邑としては省城齊々哈爾の外に、昂々溪、富拉爾基等がある。昂々溪は東支鐵道齊克鐵道、洮昂鐵道の中心地、富拉爾基は昂々溪の西方七哩、嫩江の右岸に位し、(墨爾根まで二七〇哩、嫩江河口まで二六三哩あり共に水路である)戸數四五〇戸、人口三、二〇〇人を擁し、東支鐵道の一驛であると同時に、嫩江の埠頭として大興安嶺山麓地方の物資の集散地を爲して居る市内に油房一、製粉所一、酒精及ウオツカ製造所一、東支鐵道療養所等がある。

## 二、林 甸 縣

民國六年安達、龍江二縣より分離して縣となつた。北より西一帯は草深き低濕地多く、南東支鐵道沿線に至る間は曹達地又は收草地で、耕地は主として北東のみに限られ、一望坦々たる平地であるが、一般に土地の肥沃でない爲め、開墾は遅々として進まず、殊に北より西に流れる烏雨爾河及其下流胡裕爾河は本縣の開拓を阻害すること甚しく、此の河流は平時淺く、狭く、河水の異動を見ないが、一旦降雨に際會すれば忽ち氾濫して、附近一帯沼地と化して仕舞ふ、之か爲め治水工事は既に早くより行はれ、堤防百二十支里、橋梁五を有し、現在稍小康を保つて居るが、夏季干魃の際にも猶濕地は巾十支里乃至二十支里に達し、齊々哈爾、林甸街道の中

央には、九道溝子と稱する胡裕爾河の河口を没する池沼地帯があつて、夏季人馬の交通を斷つ状態である、約十年一回の大降雨に際しては本河流は北西に於て嫩江よりの溢水を受け入れ東支線を越えて現在の洮昂線附近に於て再び嫩江本流に合することがあると言はれて居る、此の如く現在の耕地は北東方面に限られ、肥沃土を有する東部は依安縣に近く、穀産地としての價値は現在では大でない。

本縣總面積は一九九方里、三、〇九四、八五〇反内既耕地九二八、六六〇反未耕地五七九、八八〇反農産物は黍、粟等の雜穀多く、大豆の産出は少ない。

本縣の都邑としては林甸及小蒿子の二がある。林甸市街は四支里四方の縣城で戸數一、二〇〇人口九、五〇〇内外である、小蒿子は東支線驛にして、人口約一、〇〇〇に達し、林甸、依安兩縣物資の集散地として本縣農耕の進展と共に發達すべき土地である。

林甸縣城より各地に至る距離は左の如くである。

地名	支里	行程	馬車賃一石二付キ
小蒿子	一〇〇	約二日	五〇〇吊



安達	二〇〇	二日半	九〇〇吊
齊々哈爾	一六〇	二日	八〇〇吊
昂々溪	一三〇	一日半	六五〇吊

### 三、依安縣

本縣の南は拜泉地方より西流する双陽河谷及其の河口を没する一帯の低濕地帯であつて、耕地は北より東の方面に多く開拓せられて居る、地方一帯新開地で、地味一般に良好であるが就中東北部は拜泉地方に遜色なく黒色肥沃土地帯に属し西南部の低濕地も林甸地方の如く悪しからず將來有望なる農耕地である。

本縣は開設以來日猶淺く、面積二四四方里、三、七九四、六九〇反の中既墾地は七〇三、一一〇反未耕地は一、九五六、二八〇反、不可耕地は一、一三五、三〇〇反に達して居る、人口は六八、三七〇人内外であるが、最近一ケ年二、〇〇〇戸以上の移民が到來して開墾に従事しつつある、穀産は大豆年額二八七、二二〇石小麥八二、六三〇石其他高粱、粟等であつて、剩餘穀物は將來概ね齊克鐵道に吸集せられ輸入貨物も亦同鐵道に依り供給せらるるに至るであらう。

本縣の都邑としては依安縣城及双陽鎮の二つがある、依安縣城は現在に於ては一五〇戸人口約一、〇〇〇に過ぎず、城内空地多き状態である、双陽鎮は肥沃地に属し、附近殆んど開墾され人口二千に達し、繁盛なる都邑を形成して居る。自依安至各地の距離行程及馬車賃は左の通りである。

地名	支里	行程	馬車賃一石に付
安達	三〇〇	四日	一、〇〇〇吊文
小蒿子	一八〇	二日	五五〇吊文
齊々哈爾	二四〇	三日	七〇〇吊文

### 四、拜泉縣

北部の烏雨爾河、東部の通肯河に至る間には丘陵地介在し、西北より中央及西南部に亘り低地帯ある外一般に丘岡多き高原である、低地帯は狹長なる帶狀を爲し、西より東に貫通する双陽河谷地帯は降雨の際水を湛へ、盆地に湖又は沼澤地を形成し、南西部には曹達地あり稍高低多き地方である、然し乍ら中央より西及北部は厚き黒色の肥沃土にして丘岡地と雖も悉く農耕

に好適せる爲め附近殆んど開拓され、農産市場たると共に附近地方への物資の供給及中繼地として發達し、農商兩方面に於て黑龍江省中最も發達せる地方である。

本縣の耕作地は約三百二十万反、未耕地約四二万反にして人口約三百六〇萬人に達し、穀物年産約三百万石余に達し、内三分の一は大豆であつて小麥之に次ぎ、高粱、玉蜀黍は土地消費に止まり移輸出は大豆及小麥に限られ、從來夏季若干通背河を下航する外悉く安達驛より發送されて居つたが、將來齊克線の方面に吸集されるに至るのではないかと見られて居る。

縣内八鎮がある、内通背河港たる三道鎮(人口約七、〇〇〇)は物資の集散地として有名である、拜泉縣城は六支里四方の城壁を繞らし、城外にも市街がある、戸數約五、〇〇〇人口三五、〇〇〇を越え、商戸軒を競ひ糧棧三〇(冬期七〇)油房七、錢莊七、燒鍋四、電燈會社(能力一六燭光二、〇〇〇燈)及市内電話等の設備がある、長距離電話は哈爾濱、安達、三道鎮、克山、望奎、齊々哈爾、巴彥、長春、公主嶺、阿什河に達し、市街の繁榮齊々哈爾に劣らない、拜泉より各地に至る距離行程及、穀物運賃等は左の如くである。

地名	支里	行程	馬車賃一石に付
安達驛	三二〇	三日乃至四日	一、〇〇〇吊文乃至一、三〇〇吊文
三道鎮	七〇	一日	四〇〇吊文
克山鎮(二克山)	九〇	一日乃至一日半	四〇〇吊文乃至六〇〇吊文

### 五、克東設治局

本設治局は民國十八年克山縣より分離して新たに設治局となつたもので、測量面積一二〇、〇〇〇响、新農耕地は城鎮二克山の北部及東部地方が最も有望である、二克山地方の穀物は大豆最も多く次ぎに小麥である、因みに二克山は將來齊克鐵道の終点たるべき地である。

### 六、德都設置局

本設置局も亦民國十八年克山縣より分離したもので、測量面積約二二〇、〇〇〇响、訥謨爾河の左岸一帯の開墾は其濕潤地を除き二十數年に垂んとし、近時農民の來住殊に著しく、婉然たる一大殖民地を形成して居る。本地方産出の穀物は一ヶ年約十五万石と註され、内出境するもの實に十万石に達すると稱され、主に克山及二克山方面へ出廻る。

## 七、克山縣

本縣南部は丘陵地帯にて、拜泉地方に接し北は丘陵地帯を経て訥謨爾河に臨み中央部に烏爾河がある、其の流域は一帶の平地にして、西に至るに従つて平原となつて居る。河と稱するも平時は流水多からず、只だ降雨の際南岸一帶が低濕地と化する、拜泉地方より既に肥沃土の厚層を持續し、本縣に至つても丘岡上に至るまで農耕に適せざるところなし、更に此の肥沃土は本縣を越えて北方の龍鎮縣に至るまで續いて居ると稱されて居る。本縣の面積は従前八一八、〇〇〇响であつたが、客年縣制を改革し、二克山附近一二〇、〇〇〇响を克東縣とし徳都附近二二〇、〇〇〇响を徳都設置局として獨立せしむると共に泰安鎮五万响及び拜泉縣既耕地五万响を縣内に編入した。

本縣の民有耕地は約二五〇、〇〇〇响で、此の外租税を免除せられたる學田或は支那大官の有地五〇、〇〇〇响を加へて合計三〇〇、〇〇〇响内外にして、耕作地は大豆八〇%を占め其の他は小麥、粟、玉蜀黍、大麥等である。

本縣の人口は縣制改正以前二八九、二一〇人と稱せられ、主として農業に従事して居る。小作

制度は左の如く二種に分れ、更に四つに細別し得る。

### A、租 戶

此の種小作人は所要牛馬及農具を自ら準備し、小作料として毎年一响に付一石四斗乃至一石五斗を納付す。

### B、種 戶

#### (一)内 青

内青は地主に於て牛馬及農具を準備し、普通數名の小作人をして共同耕作せしめ收穫物は地主と小作人が平均に分配する。尙ほ此の場合は小作人の食費及宿舍を地主が負担するも小作人の家族食費は負担せず。

#### (二)外 青

外青は地主より家屋を提供するも食糧は負担せず、而して外青は左の二種に分たれる。

1、牛馬を地主に於て準備する場合には毎十响中一响を小作人に提供し其他九响中の收穫物は地主と平均に分配す。

□、牛馬を小作人自ら準備する場合、此の場合には毎十响中一响は小作人に提供し其の他九响中の收穫物は小作人六割地主四割の率にて分配す。

本縣著名なる都邑は泰安鎮、克山にして、克東縣城なる克山鎮は戸數一、〇〇〇人口八、〇〇〇○粮棧二〇、燒鍋三、油房一七あり將來齊克鐵道の終点として同地方の穀物集散地となるべき地である。

克山縣城は烏爾河に臨み、三支里三分四方の縣城にして、民國十七年度克山公安局調査に依れば商家二、五五七戸、民家四六四戸、人口一九、三三六人、油房六、燒鍋四、製粉三あり、齊克鐵道開通の後は重要な穀物集散地として發達すべき土地であり、昨年中現在の齊克線終点たる泰安鎮に搬出せる穀類は一日平均馬車三百台に達したと稱されて居る。

克山より各地に至る距離及穀物運賃は左の如くである。

地名	支里	行程	馬車賃一石に付
齊々哈爾	三二〇	三日	二、一〇〇吊
泰安鎮	九〇	一日	八〇〇吊

二克山	六〇	半日	四〇〇吊
拜泉	一〇〇	一日	六〇〇同
昂々溪	三六五	四日	二、一〇〇同
安達	四二〇	四日半	二、二〇〇同

泰安鎮は省城の東北二五〇支里、克山縣城の西九〇支里に位置し、龍江站より一三〇キロ米現在齊克鐵道の終点たる地である、近接都市に至る距離は左の如し。

地名	支里	行程	馬車賃一石に付
通南鎮	六〇	一日	二五〇吊
通南鎮經由 拉哈站	一二〇	一日半	六五〇同
通寬鎮	三〇	五時間	二〇〇同
通寬鎮經由 西城鎮	七〇	一日	四〇〇同
依安縣城	一一〇	一日半	六〇〇同

泰安鎮は六年前までは小なる農村に過ぎざりしも五年前より土地の開墾に伴ひ市街を形成し來り、民國十七年（昭和三年）齊克鐵道土工に着手するや市の繁榮を見越して商家の移り開業するもの多く、殊に民國十八年愈々軌條の敷設を終り、鐵道開通の見極め着くや市街は飛躍的膨張を爲したものである。

最近二ヶ年の比較は左の如くである。

項 目	民國十八年二月現在	民國十九年四月現在
人口數	約四、〇〇〇人	約一〇、〇〇〇人
雜貨商數	一三	三一

### 八、龍 鎮 縣

北緯四八度、東經一二六度乃至一二八度に位し、其總面積約九五一方里、一四、七八九、九五〇反現在の耕地面積は一七八、八六〇反に達し、尙可耕の荒地は七、三七九、四一〇反に達する見込である。氣候は寒冷で高粱の作付に適せず其他黃豆、小麥、大亞麻、粟等は均しく作付することが出来る、土質は多くは肥沃の黒土を以つて構成されて居り、砂地は殆んどない、然し乍

ら惜しいことには北黑龍江、東松花江、南哈爾濱に至るに何れも余りに遠く、人口従つて少なく開墾の進捗せざることは黑龍江省、東部諸縣中第一位に在る、然し呼海線及齊克線開通以來開墾も大いに進捗し將來は相等有望視されて居る。

### 九、訥 河 縣

本縣は西訥河を以つて布西設置局に接し、中央に訥謨爾河西流し、北老萊河谷より龍江縣の砂土及低濕地に至るまで主として黒河街道の東部克山縣に接する地方には丘岡地多きも肥沃なる土壤を以つて掩はれたる廣大なる耕作地を有し、現在開墾地多からざるも、拜泉、克山の一部地方の如き不良地全く無き爲め該地方より年々移住し來るもの相等多く將來齊々哈爾以北に於ける有數の農耕地となるべしと觀測されて居る。

本縣の面積は四三〇方里、可耕地三、六五一、三〇〇反不毛地三、〇三六、〇六〇反内現在既耕地一、一一七、七一〇反に過ぎない。人口一、二二、一六〇人にして、出產物約二二〇、七五〇石大豆及小麥を主として其他は雜穀である。

移出穀物は從來馬車輸送に依り齊々哈爾及昂々溪に運送せられて居つたが今後は齊克鐵道に

依り昂々溪方面に出廻るものと見られて居る。

本縣の主要都邑は訥河縣城(博爾多)及拉哈站の二にして何れも黒河街道の上に在る。

訥河縣城は普通博爾多と稱せられ訥謨爾河の北岸に位し、新舊兩市街より成り古き歴史を有し、光緒三十三年の建設にして農産物の出廻に於て遙か拉哈站の下位に在るも人家及人口は拉哈站の二倍以上を有する縣内第一の都會で主要雜貨店三十、粮棧約十家、雜貨兼業のもの約五、六家あり。主として廣信公司の下請を爲し、自己の計算に於て爲す粮業は少い、其他小規模の機械油房五、機械製粉所四、電燈廠一、現在十六燭約二千燈を有す。

自訥河縣城至各地の距離は左の如し。

地名	支里	行程	馬車賃一石に付
嫩江縣城	一八〇	二日	八五〇吊
布西縣城	七〇	一日	三二〇吊
拉哈站	六五	一日	三〇〇吊
齊々哈爾省城	三〇〇	三日	一、三〇〇吊

北興鎮

一二〇

一日半

六五〇吊

二百號經由  
克山縣城

一九〇

二日

八六〇吊

通南鎮經由  
泰安鎮

一二〇

一日半

六五〇吊

拉哈站は省城の北二四〇支里、訥河縣城の南六五支里、嫩江の東岸に位する、戸數約一、二〇〇人口約九、〇〇〇を有し、附近に於ける名邑である。東方六〇支里通南鎮を中心とする一帯の地方は克山地方に連続せる良耕地で其地方物資集散市場として拉哈站は繁榮なる市街を形成し雜貨店、主要雜貨店二〇、粮棧一五、油房一、製粉所二、燒鍋一、電燈廠一、(目下建設中)あり、夏季は西方十支里の嫩江埠頭より冬季は馬車にて穀物を移出し昨年(昭和四年度出廻)は約三十万石と稱されて居る。

齊訥鐵道は齊克鐵道の起点たる龍江站より六二キロの地点に在る、齊年站より拉哈站を経て訥河に至る未成鐵道であるが拉哈站までは既に開通せる爲め、拉哈站は穀物集散市場として益

々發達し、訥河縣城の繁盛を奪ふに至るであらう。

## 一〇、嫩江縣

縣城は普通墨爾根と稱せられる、一、六八六年建設せられ、民國二年縣と改められたものである。

本縣は訥河縣の北に接し大小興安嶺の間に介在する人跡絶えたる地方をも含むを以つて管轄は頗る廣大にして、面積約三、四五三万里五三、七〇一、〇六〇反と稱せらるるも山岳及河川地帯多く其の實際の面積は明確でない。既耕地約三七萬反と稱せられ、訥河縣城より喀迷哈までは耕地連續するも、それ以北は高原にして耕地なく、嫩江縣城を去る西に二十支里の地点に於てはトラクター七台を以つて開墾に従事しつゝある。目下縣内にはトラクター二十台あるも、春遅く冬早く耕作地としては餘りに北寄り過ぎて居る、出産物は林産獸皮藥材にして、鑛物に富むといふも未だ精確なる調査は行はれて居ない。林産物の如きも亂伐主義で現在に於ける森林は河口より非常に遠き深山まで入るを要し年額筏材は二、〇〇〇排（一排直徑四五寸のもの百本）流送し來ると云はれて居る。

全縣の人口は六五、三八〇人に過ぎない。南部を除くの外、山岳地帯に屬し平原より驅逐せられたる蒙古族の自由の天地にして森林は天然の儘放置せられ禽獸横行し未だ原始的状態を脱しなす。

嫩江縣城（墨爾根）は訥河縣城の北一八〇支里、嫩江の東南岸に位し、黒河に至る四八十支里である。約二七〇年前の開基に屬するも、他地との交通不便なる爲め土地の開発、經濟的發展遅々として進まず今日に至つた、昨年露支時局に關連する軍隊移動の悪影響は當地方に最も痛切にして附近の住民離散し、現在舊街を合し人口約八、〇〇〇に達せざる見込みである。

街の西南に關帝廟あり、堂宇、古木共に百年の昔を偲ぶべきも、庭内は目下騎兵隊軍馬の繋馬場として使用せられ馬臭紛々として低徊冥想に湛えないものがある。

### 一一、布西設置局

本縣は舊西布特哈である。布特哈なる語は獸獵又は漁獵者の意で、往昔其の種族の名から索倫又は鄂倫春人の住む地方名となり最近まで西布特哈と稱して總官が駐在したが民國四年解放せられて同七年總官の職を兼掌する設置局を設けて今日に至つて居る。本縣は甘河を以つて嫩

河縣に、嫩河を以つて訥河縣に接し、南部は若干の平原を以つて、甘南設置局に界する外、北及西一帯は川より五六支里にして山となり、興安嶺に至るまで山と川のみのでにして、面積頗る廣大であるが、既耕地僅かに一四五、六六〇反に過ぎず、土著漢人少なく、將來農耕地としての價値に乏しい、在住民の多くは農耕地の漢人より驅逐せられたる索倫、鄂倫春、達呼爾人にして全縣人口三九、五九〇人である中、若干の蒙古人あり、牧畜と山河の獵に從事し最近に至るまで、蒙古包を着して遊牧して居るものがあつたが、放浪の人種は遠く山中に入り伐木薪炭に依つて生活する状態である。産物は林産多く、布西に集まる農産物は一冬約八万石に過ぎず、内粟最も多く、大豆二位にして小麥は第三位である。

城鎮布西は訥河縣城の西約七〇支里、嫩江本流を去る二支里の西方高地に位置し、南方拉哈站に至る約七〇支里である、市街は城壁城濠を有せず、人家は江西岸より不規則に連続して、市街中心に至り、附近一帯を合し人家約一八〇戸、人口約八〇〇内外である、市中に主要雜貨商七あり、粮棧は専門の家なく、各雜貨店にて兼業し、概ね廣信公司の下請買付を爲し、自己の計算に依る買付は大でない。燒鍋二家あり、製品を訥河縣城及嫩江縣城に出して居る。製粉所

は未だ一家もなく、各商家に舊式の磨坊を有し、機械麥粉は昂々溪及訥河縣城より移入して居る。

城鎮を去る西三〇支里北一五支里の地点に花崗石を産出する。甘河炭坑は昨年冬米人技師探層の結果は有望なりしものの如く、土地人の言に依れば支那銀行團に於て資金五〇萬元を出資する計畫であると言ふ。

因みに當設置局に於ては昨年收穫不良の爲め農民の窮乏甚だしく、自己所有地を賣却するものもあり、縣城を去る十支里内外の地点、耕地一井(約一千响)二千元乃至三千元である、農民の自己所有地賣却の傾向は北興鎮地方に於ても亦聞く所である。

## 一一、甘南設置局

本設置局は昭和二年二月布西縣及龍江縣(齊々哈爾)より分離して設置局を設けられたるもので、北西は直ちに山地であるが、東南は平々坦々たる大平原で、面積二七五方里、四、二七六、八〇〇反、中既耕地は一、一七、〇四〇反に過ぎない。全縣人口二五、五九〇人(内約七分の一は達呼爾人にして牧畜及農業に従事す)に過ぎないが、興安嶺の山地帯から東流する音河及倫河



は小河流にして流水極めて少なく、嫩江西岸地方に於ける最も有望なる農耕地を形成して居る。城鎮甘南は齊々哈爾省城の西北一四〇支里、東支鐵道富拉爾基驛に至る約一八〇支里の地に在り、南北五支里、東西三支里の街基を有し、極めて廣寛、且つ街路整然たり。尙市の西方二支里の邊に丘陵南北に流れ、遙か北方には數基の山岳を望み、雜莫たる北滿都會中稀に見る景色である。市街は五年來の發展に係り、民國十七年一ケ年間に商家激増して今日の市街を形成した。市内に雜貨商約二十三家あり、附近の穀物可能移出高約八千石にして、齊々哈爾省城及富拉爾基に輸送される、石炭は鷄冠山(六架帳房經由約一〇( )支里)の採炭計畫中なるも炭質不良にて採算如何は尙ほ不明である。燒鍋は南北大街の北端に一家あり。當市の家賃は一昨年頃迄一間大洋二十五元見當であつたが昨年舊曆二月の切替期に四十元乃至五十元見當に騰貴した大洋其物の下落にも依るが、尙ほ家屋の沸低せる爲めである。

東陽鎮は齊々哈爾省城を去る一七〇支里、甘南縣城を去る一四〇支里の地に位し、甘南縣城に次ぐ都邑で民國十一年に創設されたものであるが市街の發展は民國十六年以來のこと、民國十七年、十八年の二ケ年間に商家の増加を見たものである、市中に出廻る一ケ年の穀物は高

梁五萬石、大豆三萬石見當にして大豆は昂々溪及富拉爾基に向け輸送されて居つたカラ哈站まで齊克線の支線が開通したので今後は同鐵道に依るものと思惟される。市中には専門の糧棧なく雜貨商の兼營するものが多い、其他燒鍋一、油房二あり本鎮より各地に至る距離は左の如くである。

至拉哈站

七〇支里

至布西縣城

一二〇支里

至嫩江本流

八支里

齊々哈爾より甘南に至る二百支里の間は其の間稀に小部落あり、耕作地連續して居るが、其他は一面廣漠たる平原で、丈高き草花が時を得顔に咲き誇つて居る、甘南より東陽鎮に至る一四〇支里の沿道も亦耕作地を見るが、其他は悉く草地である。斯の如く本縣は現在の所穀物は土地消費の外移出されるものは少いが、平原は皆肥沃なる土地である爲め、逐年移民多く將來頗る有望な土地である。現在の出産物は興安嶺産の木材(主として小丸太)木炭、牧草等で、山林區には河谷地を經由して達する交通路あり、海拉爾より畜類を逐送し、本縣の収入はそれ等

の通過税に依つて保持されて居ると言ふことである。

甘南より北方の山地帯には金長春邊堡又は成吉思汗堡壘線俗に老邊(舊き境界線の意)と稱する地圖上獨特の境界線あり、洮南の北西索倫山より起り成吉思汗にて東支線を横斷し、甘南布西を過ぎて舊布特哈附近嫩江に達して居る。現在に於ては平原と境する丘陵の高地に一種の塹濠を堀り高さ二間餘の堤防狀を爲し遠くより之を眺むれば恰も萬里長城の如く見へる。甘南の北二十支里附近の音河近邊から此の邊防に登れば山地帯は緩き傾斜を爲し山は次第に深まり、遙かに重疊せる深山を望見し、前面に展開せる平々坦々たる平原は見渡す限り雲際に没し、廣野は一面に丈高き女郎花に蔽はれ一木一村なき處女地である。

## 第五章 背後地商業事情

### 一、概 説

#### 一、都 邑

接讓各縣に於ける主要都市としては。

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 一、龍江縣 齊々哈爾市 昂々溪 富拉爾基    | 二、林甸縣 林甸 小藁子           |
| 三、依安縣 依安縣城 雙陽鎮          | 四、拜泉縣 拜泉縣城 三道鎮         |
| 五、克東設置局 二克山(克山鎮)        | 六、克山縣 克山縣城 泰安鎮 通寬鎮 西城鎮 |
| 七、龍鎮縣 龍鎮縣城(龍門鎮)         | 八、德都設置局 德都鎮            |
| 九、訥河縣 訥河縣城(博爾多) 拉哈站 通南鎮 | 一〇、嫩江縣 嫩江縣城(墨爾根)       |
| 一一、布西設置局 布西縣城           | 一二、甘南設置局 甘南縣城 東陽鎮      |

等の都邑があつて、夫々地方農民の需要を充たして居る。

#### 二、需要商品の種類

而して之等各地方に於て消費せられる商品の種類を見るに大体左の如くである。

- 一、毛織物—厚手外套地、薄手外套地、西洋服用メルトン、サージ、支那服用サージ、コールテン、禮服呢
- 二、天然絹織物—各色支那服用絹、緞、支那チリメン
- 三、人造絹織物—各色、各柄
- 四、生地綿布—

粗 布—遠塔、文珠、三元寶、水月、金城、三兔  
大尺布—畢公大、正大明、章萬大、三輪、象冠  
細 布—軍人、月鯉、彩球、象花  
細 綾—頰、三星

五、加工綿布—各色染粗布、染細布、染大尺布  
五枚朱子、八枚朱子、染四綾、捺染五枚朱子、捺染細綾、捺染更紗、光輝付シンス、モスリン、  
縞三綾、各種變り織、小倉織

紅天竺、晒金巾、晒粗布

六、綿製品—敷布(白、色)靴下、手袋、メリヤスシャツ、腰帶子、サルマタ

七、毛製品—ジャケツ、首巻、靴下、手袋

八、支那鞋、ゴム底支那クツ、運動クツ

九、陶磁品—茶瓶、湯呑、コーヒ茶碗、飯碗、菜碗、菜皿、蓋付壺、口字、酒盃、灰皿、花井、帽筒

一〇、ア・ミ製品—深底鍋、淺底鍋、匙、手付コップ、湯沸シ

十一、珠瑯引鐵器—洗面器、痰筒、深底鍋、石鹼容器、匙、三色コップ、三色茶碗、ローソク立テ、丸底及平底湯

### 沸

十二、ガラス製品—各種ランプ、ホヤ、各形コップ、鏡、魔法瓶、山水花鳥類、花瓶、灰皿、板ガラス

十三、五金—眞鍮洗面器、水煙台、南京錠、文鎖、墨汁入、ナイフ、剃刀、鎖、針金、釘、鎌

十四、農業用、家庭用生鐵器—鍋、釜、火箸、スキ先

十五、化粧品—化粧石鹼、齒磨粉、練齒磨、クリーム、白粉、花露水、生髮油、ホマード、頭髮油、桂母油、香水、

### 口紅

十六、ブラシ—齒ブラシ、靴ブラシ

十七、玩具—セルロイド人形、セルロイド動物、ブリキ汽車、電車、ゴムマリ、萬國旗

十八、洋服附屬品

十九、文房具—墨、墨汁、筆、紙、鉛筆、手帖、書包

二〇、皮革製品—皮帶、彈帶、拳銃サツク、鞭、手提籠、靴、紙幣入

二一、男、女四季帽子、雨傘、日傘、ステッキ

二二、女髮道具、男髮櫛

二三、純毛布、綿毛布

二四、各種ボタン

二五、縫糸、縫針

二六、各種時計

二七、支那樂器及大正琴、昭和琴

二八、柳行李

二九、油漆布

三〇、スダレ、蠅排、子供寢蚊屋、ノミトリ粉

三一、セルロイド製品—パイプ、櫛、髪飾、舌カキ

三二、砂糖、冰糖、麥粉、石油、マツチ、ローソク、煙草、果物罐詰、エナメル塗料、ベンザン油、灰洋毯、白米、茶葉、果實、果實種子、石炭、ソーダ、機械、農具、洋酒、乾菓子、味ノ素、紙類

### 三、仕入地

而して之等商品の仕入地は。

#### 一、哈爾濱

六〇%

二、省城

二五%

三、長春、奉天、營口、天津

一五%

の順序であるが斯くの如く哈爾濱仕入れの多い理由は。

一、綿糸布諸雜貨の價格が哈爾濱は省城よりも格安なること

二、哈爾濱は支拂條件が省城商家のそれよりも長く、奥地商家が冬期の始めストックするに都合よきこと

等に起因して居る。

### 四、移輸入數量

扱て之等の商品が背後地に於て年々幾程づつ消費さられるかは據るべき數字なくして之を知り難いが、今貨物が背後地へ移動する爲めには必然通過すべきところの東支鐵道昂々溪驛、富拉爾基驛、小蒿子驛、安達驛等の到着貨物數量を示し其の大体を察知することにする。

イ、東支昂々溪(齊々哈爾)驛普通便扱營業貨物到着高 (單位キロ屯)

種目	年次				
	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
雪花石膏、石灰 セメント	一、二三五	八六四	一、七五二	二、九一五	六、四一九
黄	五三一	四六六	七五三	七三〇	一、七三二
砂糖	四七五	五〇八	九二七	一、一七九	一、〇七四
石油	一、一〇七	一、二五二	一、六七四	二、四八五	一、五七五
揮發油	八六	二六六	五七九	一、〇七六	七二一
紙類	二四九	四三八	九〇三	七五〇	七〇七
棉花、綿	二六八	二七七	二八一	三八五	三六三
果實	八八八	一、〇九四	一、〇二六	一、八九五	一、五五一
穀物類	二、八〇八	六、三三九	四、七五六	六、六一二	二、二七五
魚類	二五八	三一九	四九一	六〇四	四二二
鐵作品	四二〇	五七三	八四四	九六八	一、二四三
食料雜貨	三七九	四七〇	八七七	一、二七	八九九
鐵(加工セザル モノ)	二七六	四〇五	七五八	九九四	一、一九七
蠟燭	八五	九七	一九一	一八三	一八七
硝子及硝子製品	一八八	一〇〇	二五六	三二七	五二二

種目	年次				
	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
イ、昂々溪驛	三四、六二九	四二、二八九	六八、六八九	七三、四九六	一〇七、七〇八
ロ、昂々溪營業所	二、〇三三	六、四〇一	八、五五八	一八、三三九	二〇、三二二
計	三六、六六一	四八、六九〇	七七、二四七	九二、九三五	一二八、〇二九
内譯					
自線内各驛より	二八、五三三	四〇、四六六	六七、六四四	八一、七一四	一〇八、四〇三
烏鐵より	六五四	二二三	六五六	一、二六〇	七四四
滿鐵より	七、四七四	八、〇一一	八、九四七	八、九六一	一八、八八三
到着主要貨物	三、八二六	四、〇九六	五、〇〇四	五、二〇九	八、二三四
鹽	一一、九六四	一〇、一一〇	二六、七六二	三〇、二二三	四三、九四三
石炭	一、四一六	一、四三三	一、四三八	一、九五三	二、一三二
織物類	一、二一〇	一、〇七九	一、七〇五	七、七〇三	三、〇六四
麻袋	二、六七二	二、〇五八	五、三〇二	八、五八三	一四、五〇四
建築用木材					



備考 本驛到着貨物は主として、甘南、東陽鎮方面に向ふ。

ハ、東支小嵩十驛普通取扱營業貨物到着高。(單位キロ屯)

種目	年次				
	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
到着高	一、七九七	五、九六八	一三、〇〇五	二〇、六二八	二二、六六五
内 譯					
自線内各驛より	一、七六五	五、八五六	二二、七五三	二〇、四二五	二二、一九三
烏鐵より	—	—	—	五〇	—
滿鐵より	三三	一一	二五二	三四三	四四八
到着主要貨物					
織物類	一三八	一九六	二二三	二六六	三五三
麻袋類	一二六	四六四	一、〇八三	一、二五四	一、四九一
石炭	五三	三八二	九九〇	一、三三五	一、六六九
建築用木材	七〇九	二、八四一	五、五七七	八、八七六	九、一五五
砂糖	五三	八一	一一八	一八九	二二一

ニ、東支安達驛普通取扱營業貨物到着高。(單位キロ屯)

種目	年次				
	一九二五年	一九二六年	一九二七年	一九二八年	一九二九年
鐵作品	五二	一〇六	一一七	一八四	二四五
穀物類	八五	二六二	一、〇四〇	一、七八二	一、七九三
種子油類	六	二二	四九	二二三	一六三
石、礦石	一〇〇	一一二	六九	一、一四〇	七八九
イ、安達驛	九四、二〇七	一一一、四一九	九九、九七六	八〇、七一四	七二、四六二
ロ、安達營業所	—	三、〇六三	三六、三七五	四一、五五二	二七、二九六
計	九四、二〇七	一一四、四八二	一三六、三五一	一二三、二六六	九九、七五八
内 譯					
自線内各驛より	七四、二九八	九二、一五一	一一、三八三	九三、九六五	七四、五一三
烏鐵より	一、〇八〇	二、〇三三	一、二八五	一、五三六	一、〇〇七
滿鐵より	一九、八一九	二二、二八七	二二、六八三	二六、七六五	二四、二二八

鐵 作 品	九八三	一、二三四	一、五一九	一、一九一	八六一
木 作 品	一、一七四	一、〇五四	五九六	四二五	一五一
石、礦 石	一、九八三	一、九〇七	四、二四二	四、三九三	二、二五三
藥品及藥劑類 (加工セザルモノ)	八五四	七二三	九一九	八八二	九〇四
果 實	一、一八七	一、一七一	一、六二三	一、四六八	一、一四六
食糧雜貨	六二三	七八五	一、三六〇	二、八七九	一、九六三
魚 類	一、二四二	一、五八三	二、七〇三	二、〇五一	八四一
粘土製品及粗陶器	七五九	八九七	一、二六五	一、二九九	一、一六七
馬車附屬品	五五八	八三	六八四	二〇七	三三
化粧品各種	七二八	四七〇	五〇六	五二八	三六六
小 間 物	四六六	四六〇	九五〇	七七三	六四八
編 物 類	七八七	一、一八九	一、七九六	一、二〇七	一、〇九二
家畜(頭數)	四九九	一、七一五	六五一	四六六	七〇七

到着主要貨物	五、六六二	六、九四六	七、七三二	五、六四八	五、三九〇
麻 袋	一、二九四六	二六、二二五	三〇、〇三三	三一、三八七	二六、九八〇
石 炭	三三、〇一五	二九、四一三	三三、七二二	二二、六八五	一五、一四〇
建築用木材	三、〇四六	二、八三四	二、七七七	二、三七八	二、三〇四
織 物 類	六、五八二	八、三六七	一〇、八一九	七、八七二	七、四一四
薪	六、六五八	七、八八八	八、三九七	八、七八一	九、一四八
鹽	二、五〇一	三、八四五	四、九〇八	五、三三六	四、三二六
穀 物 類	二、三九三	二、三一九	三、〇五四	四、一八三	三、五七九
石 油	一六八	三二三	四一五	七九三	七六〇
揮 發 油	六九四	六三二	六五四	五六二	四八六
棉花、花、綿	一、三二二	一、二七二	一、五八五	一、八七八	一、七四二
雪花石膏、石灰、セメント	八九一	九二六	一、一二五	九四一	一、一五三
黃 紙	六四三	六八一	九七九	九八九	八四二
紙 類	六九一	九三七	四、五三〇	一、八二三	一、六三八
砂 糖 類					



## 備考

本驛に到着せる貨物は安東内部及青崗、明水、望奎方面に向ふものの外概ね拜泉、克山方面に輸送される。而して一九二九年は齊克鐵道の一部齊一昂間が開通した年である。

尙ほ此等各驛に於ける貨物の外齊克鐵道自身に依る輸送貨物があるが、これに就ては前編

齊克鐵道輸送統計を参照せらるべし。

## 二、齊々哈爾

齊々哈爾は嫩江の東岸に沿ひ、北緯四七度二二分東經一二三度五分の地点に位し、人口約十萬と稱せられ、支那人が最も多く、滿鐵公所の調では六万余人といはれて居るが實際は八万以上であるとのことで、日本人一三五人、朝鮮人一五四人、露西亞人一二二人、其他蒙古人は殆んど居ないといつて良い。

素と此の地は軍事的必要から生れた都市で往昔は蒙古の一寒村に過ぎなかつた、黒龍江省城となつたのは康熙三八年で、爾來二百余年を経て今日に及んで居る。市街は南北に長く、中央稍北に編して城壁を圍らした内城がある。此の内城の南門外を南大街と稱し商業の中心地で大小の商戸櫛比し、道路はコンクリートで打つた感じの良い商店街で省城第一の賑やかさである。

る。

齊々哈爾は政治及軍事の中心地として發達した市街である爲め商業は割合に發達して居ない此の地商務會に登録してある各種營業戸數は約二百五十戸であるか商品を直接生産地から移輸入するやうな商人は殆んどなく特産商にも余り大きな商人は居らず大部分兼業者であり專業者といふ程のものがない。之は特産の出廻が少いからでなく出廻は相當にあるのであるが從來廣信公司の無謀な買占めの爲めに皆屏息して特産商が發達しない爲めである、邦商の現状は甚だ振はず、只日本商品の販賣を目的として設立された商品館として昭和祥が異彩を放つて居るが之とても本年などは銀安の影響を被つて業績は思はしくない。

一、主なる輸入品、穀物、薪、石炭、木材、石油、織物、鐵製品、煙草、砂糖、鹽、飲料、麻袋、硝子類、

植物油、棉、綿糸、綿布、洋紙、陶器類。

二、主なる輸出品、穀物、魚類、西瓜。

三、移輸入品の仕入地、此の地商人の仕入地は哈爾濱であるが、特殊の商品に限り、長春、奉天、營口、天津、大連等から仕入れてゐる。

四、移輸入品の消費地、此の地に入荷する商品消費地は其の背後地たる甘南、林甸、依安、訥河、嫩河、布西、克山等の齊克線接讓地帯一圓である。

此の地に於ける金融機關としては廣信公司あり、紙幣の發行權を有し省の金融機關として活動する外、採鑛、製粉、製油、燒酒醸造、毛布業、船舶業、電燈業、特産業等各種の業を營み省内樞要の地点は勿論、哈爾濱、奉天、營口、大連、山海關、天津及上海方面にまで支店を設けて手廣く活動して居る。

其の他の銀行としては中國銀行支店、東三省官銀號支店、東北商業公司、中東實業銀行がある。尙此の外金融業に携はる錢舗として中大銀號、公成玉、益發號、寶豐玉銀號、義利永銀號等がある。

通貨は其の種類極めて多いが廣信公司の官帛、四分利公債、其他現大洋票等がある。

#### 輸入市場としての齊々哈爾

金物及農具以外の綿糸布、砂糖雜貨類の輸入額は年約三百萬圓内外で、内、綿糸布が約百五十萬圓、砂糖五〇萬圓、其他雜貨が百萬圓見當であるが、之等の中七割は日本品である。

是等の外に哈爾濱の秋林商會は農具を専門に賣込んで居るが、アメリカ、ドイツ製品で其等の數量及金額は不明であるが、背後地人口百三十四万の内六割以上が農民であることに鑑みれば此の農具の輸入は相當多額に上るものではあるまいか。又砂糖に就ては北滿貨車の二〇車位の年額需要があり昭和祥、ツイクマン、三井、三菱等の手に依り主として日本糖が供給されて居つたが、最近銀價下落に依り香港糖たる所謂大古糖の進出の爲めに日本糖も稍苦戦の状態に陥つて居る。又金物の中亞鉛板は相當に需要あり有望商品と見做されて居る。それから日本の紀州密柑は浦汐經由で十一月から十二月頃までに北滿貨車の約四〇車内外輸入せられて居る。因みに黑龍江總商會に於て改組の際派員調査した此の地支那商店の中金物雜貨商にして一萬元以上の資本を有するものは左の如くである。

營業店名	資本	經營者
金物 匯川行	一萬元	杜 瀝 川
雜貨 元 豐 厚	同	謝 海 秋

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 雜 貴 同 同  
 貨 金 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨

興 德 義 天 德 同 天 集 永 錦 復 昆 三  
 隆 增 和 和 增 盛 寶 雲 隆 和 祥 恒 合  
 魁 長 公 鴻 久 和 號 祥 元 祥 店 利 永

一萬一千四百元  
 一萬五千元  
 二萬二千元  
 一萬元  
 二萬一千元  
 一萬元  
 一萬九千六百元  
 二萬二千元  
 一萬九千元  
 一萬三千元  
 一萬二千元  
 一萬九千元  
 一萬五千元

王 史 趙 典 杜 徐 牛 劉 楊 張 郭 王  
 舜 維 佐 文 子 煥 占 子 達 春 春 德  
 生 周 臣 譚 雲 久 元 和 一 華 華 山

雜 貴 食 同 同 同 同 同 同 雜 同 吳 同 同 同 雜  
 貨 金 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨 貨

寶 永 鴻 大 增 公 洪 瑞 寶 東 瑞 永 福 增 和  
 豐 聚 發 來 盛 和 昌 林 山 昌 興 慶 順 盛 成  
 慶 源 永 公 公 厚 盛 祥 永 盛 號 源 興 興 發

一萬元  
 一萬五千元  
 一萬二千元  
 二萬元  
 一萬三千元  
 一萬四千元  
 二萬元  
 二萬元  
 一萬元  
 一萬五千元  
 一萬五千元  
 一萬四千元  
 一萬四千元  
 一萬元

石 秦 王 劉 張 孫 張 梁 吳 陳 李  
 鵬 小 德 子 子 鏡 少 明 德 國 春 壽  
 飛 波 善 華 貞 清 彭 起 文 臣 軒 山

### 三、拉哈站

拉哈站は嫩江の東岸に位し、寧年站より四八キロ、訥河縣城まで北に六五支里、省城の北二四〇支里、現在寧訥鐵道の終点たる地で戸數約一、〇〇〇、人口七、〇〇〇程を有する奥地有數の都邑である、市中に主なる雜貨商約二〇戸あり、就中魁昇福、天豐隆、玉興和、天豐厚、魁昇利、天成玉、天豐久等は一萬元以上の資本を有し手廣く活動して居る。

商品の仕入地は主に哈爾濱で、省城は從である。之が原因としては。

- 一、綿布類の相場は概して哈爾濱の方が割安なること。
  - 二、雜貨類に於ても亦之の傾向あること。
  - 三、哈爾濱商家の賣掛代金取立は省城商家のそれに比し比較的寛大なること。
- 等を擧げ得る。向ほ哈爾濱、省城に次ぐ仕入地は營口で、營口仕入品の重なるものは上海土布、鐵器等である。

本站の將來は從來本站が訥河、克山、布西其の他背後地の雜穀出廻の中心となつて居つたのに齊克鐵道開通後其の繁榮を幾分泰安鎮に奪はれた形にあるが、昨年十月寧訥支線が當地まで開

通してより再び特産物吸集の利便を生じ目下相當繁榮して居るが寧訥線が訥河まで通するに至らば中間驛として、其の隆盛は訥河に奪はれるに至るであらう。

### 四、泰來鎮

市中の主なる雜貨商は左の如くである。

店名	開業年	店員數	本支店關係
裕昇厚	民十七年	一〇	
協合泰	同	八	
義盛泰	同十八年	一〇	
利增泰	同十七年	一二	
玉興泰	同十八年	一〇	
鴻義成	同	一〇	
義興泰	同	二五	
萬發號	同	一五	
興順長	民十六年	二〇	
德裕祥	同十八年	一五	
公興玉	同	一五	
和泰盛	同	二〇	
慶聚福	同	一〇	
洪聚昌	同	三〇	本店拜泉
慶泰祥	同十七年	二〇	
洪興隆	同十八年	三〇	本店奉天

和發源	同十七年	二〇	本店長春	廣源慶	同十七年	二〇	
永遠盛	同十八年	三〇		民生商店	同十八年	二〇	黑河より
東盛久	同	二〇		會來盛	同十七年	三〇	本店安達
洪順源	同	二〇	本店安達	德盛昌	同十八年	二〇	
天合泰	同十七年	二〇		東昌隆	同	一五	
福玉昌	同	一五		義增德	同	二五	
泰和祥	同十六年	一五		和泰恒	同	二〇	
泰興永	同十八年	二〇					

商品の仕入地は拉哈站と同じく主たる仕入地は哈爾濱で之に次ぐ仕入地は營口、奉天、天津等で省城仕入れは之等の下位にある、營口仕入品の重なるのは上海土布鐵器等で、奉天、天津仕入品は男女四季帽子、毛製品、手袋等である。

本鎮の將來は齊克鐵道が克東縣城二克山まで延長すれば當然特産出廻の中心を同地に奪はれ此の地の繁榮は衰へるものと見られ、當地商人は鐵道の二克山延長を呪つて居る。

五、克山縣城

小資本雜貨商は大資本雜貨商との競争に敗れ、概ね近接都市に逃避して居るがこの傾向は今後も持續すべく、目下各商家の内容は比較的充實し、大資本相互の競争時代に入つて居る。何れの店舗も二〇乃至三〇の店員を擁し、其の名の示すが如く百貨店、百貨商場式のものが多い市中に純卸商はないが、哈爾濱安達に本店を有するものは準卸を行つて居る。市中に於ける商店は左の如くである。

會成興、魁森廣、福合永、泰和盛、順和祥、恒來源、永合福、萬合永、裕德興、義和盛、興順永、永盛裕、同順號、德順成、裕盛德、天合博、和順隆、正豐憂、永盛利、大昌源、德升厚、裕成東、商品の仕入地は大體。

- 一、哈爾濱 五〇%
- 二、營口 二%
- 三、安達 一〇%
- 四、省城 五%
- 五、奉天、長春、天津其他 一五%

見當で、營口、哈市の仕入れ多きは兩地の仕入れが他地に於ての仕入れに比し割安であること勿論であるが、代金決満期が他地よりも長期なることも一の原因である、蓋し交通不便の地に

在つては冬期の終りに當つて或る程度まで資力以上に手持品を準備して置く必要があり仕入代金の短期取立に耐へないからである。

仕入品の輸送経路は。

一、泰安鎮まで汽車、後は馬車

二、安達、拜泉より馬車輸送

の二途であるが、本年の如く馬車輸送の安いときは第(二)に依るものの方が多い。因みに當地の將來は鐵道の開通に依つて泰安鎮の繁榮を奪ふに至るであらう、尙ほ泰安鎮に設置される豫定であつた雜穀取引所は克山となるらしい。

## 六、二 克 山

二克山は克山縣城を去る東に六〇支里の地点に在り、將來齊克線の終点たるべき地で、最近克山縣から分離した克東設置局の城鎮である。

市中の主なる商家は左の如くである。

裕和東、福生祥、義泰昌、福盛長、永興源、盛興長、義聚東、廣興東、和源泰、萬興魁、東順茂、永成

祥、德厚成、泰成祥、魁升永、裕興德、福源興。

各商家の内容は克山縣城のそれに及ばないが店の廣さ、手持商品の量、店員包擁數等は泰安鎮よりも大なるが如くである。

當地の將來は鐵道が當地まで開通して、地方に向ふ荷馬車を當地に吸集するやうになれば相當見るべきものがあるに至ると看られて居る。

## 七、拜 泉 縣

拜泉縣城の商況は奥地需要者と奥地都會との接近に依つて往年の如く行かず、齊克鐵道の開通に依つて農産物及移入品の通過路としての利益の幾分を奪はれ更に該鐵道の克山延長の氣運に依り一層前途の不安を増して居る、市内東西南北の二大街に面して一昨年頃まで華々しかつた雜貨商が整理の爲め閉店して居るのを實見するときは拜泉の爲め誠に淋しい感じを抱かすには居られない。

而してこの閉店の原因が。

一、商内減少に依り收支償はざる爲めか

- 二、手持品の値下に依り整理の斷行を余儀なくせしめられたか
- 三、糧業に手を出して失敗したか
- 四、或は其他の事故に依るか

は個々に就て一様ではなからうが。

- 一、各商家共一昨年頃までの如き賣上のないこと
- 二、哈爾濱物價の値下り同業者の競争、賣上減に依り利益率の低下の二原因に依つて行詰まつたことは事實である。

然し乍ら一、農産が平作を保ち二、通貨安定し、三、哈爾濱の物價も安定し、四、商家の自減又は他地への移轉に依り數の淘汰が行はれるに至れば商家の賣上と利益は増加すべく、従前より稍レベルの低い拜泉の復活は可能である。

## 八、德 都 鎮

本鎮は北興鎮に比し背後地部落更らに狭小で、本鎮より克山、二克山に通ずる道路は特産物の運搬に適せず、將來大なる發展は望み難い、市中の雜貨商は。

德慶東、寶聚東、大德魁、德裕恒、同興長、發發東、福順號、天聚東、民興長。等あり各商家の仕入れは少量で隨時、哈爾濱、安達、省城、泰安鎮、拉哈站等で不足商品の仕入を爲して居る。

## 九、訥 河 縣 城

訥河縣城は人口及人家の点に於ては拉哈站に二倍する城鎮であるが、農産物及商業取引に於ては拉哈站の下位に位する。

市中に於ける雜貨商は大小約四十軒に達するが。

新盛東	民國十八年開業店員數四〇名
大盛永	開業時資本一萬五千元にして、營業年數九ヶ年店員數三〇名
阜茂東	開業時資本二萬五千元、營業年數三ヶ年店員數三〇名
義興泰	開業時資本二萬五千、營業二ヶ年、店員數三〇名

等は相當見るべきものがあり、稍綿布、絹布、洋雜貨に重きを置いて居る外他は依然純然たる八百屋式である。

取扱商品は従來哈爾濱、齊々哈爾等に於て仕入れられて居たが、哈爾濱は省城に比し、綿布雜貨の相場が割安で、掛金の回收が寛大である爲め、最近哈爾濱仕入れの方が増大して居る。而して之等商品の輸送路は大休。

- 一、省城仕入品、省城にて馬車積、拉哈站にて馬車積、省城にて船積
- 二、哈爾濱其他にての仕入品、昂々溪にて馬車積、拉哈站にて馬車積、又は富拉爾基にて船積

等の方法に依つて居る。

昨年十月拉哈站まで鐵道開通し訥河の商勢は稍もすると拉哈站に奪はれ勝であるが寧訥線が拉哈站から更に訥河まで開通すれば當地の商勢も復活し、糧業も隆盛に至るであらう。

### 一〇、嫩江縣城

嫩江縣城は一名墨爾根と稱し、訥河縣城の北一八〇支里、嫩江の東南岸に位して居る、黒河まで四八〇支里あり、約二七〇年前の開基に属するが、交通不便の爲め土地の開発、經濟的進展は遅々として進まない、人口約八、〇〇〇人。

市中に大小合して二十數軒の雜貨商があるが、其の中。

萬遠達	開業時資本金	五萬元	營業三ケ年	店員數	三〇名
仁義德	全	四千五百元	全十一ケ年	全	二〇名
華泰新	全	五萬元	全三ケ年	全	一〇名

は最も綿布絹布洋雜貨に重きを於いて居る。

商品の仕入地は訥河と同じく、主として哈爾濱に重きを置かれて居る。

當地への貨物の輸送経路は。

- 一、訥河縣城經由陸路輸送
- 二、富拉爾基又は省城より水路輸送

等であるが水路輸送は運賃は安く付くが時日を要する。

當市は一昨年露支事件の折軍隊の爲めスツカリ荒らされて市中は馬糞の臭氣充滿し、商人の他地に避難するものもあり商勢屯に衰へて居る。

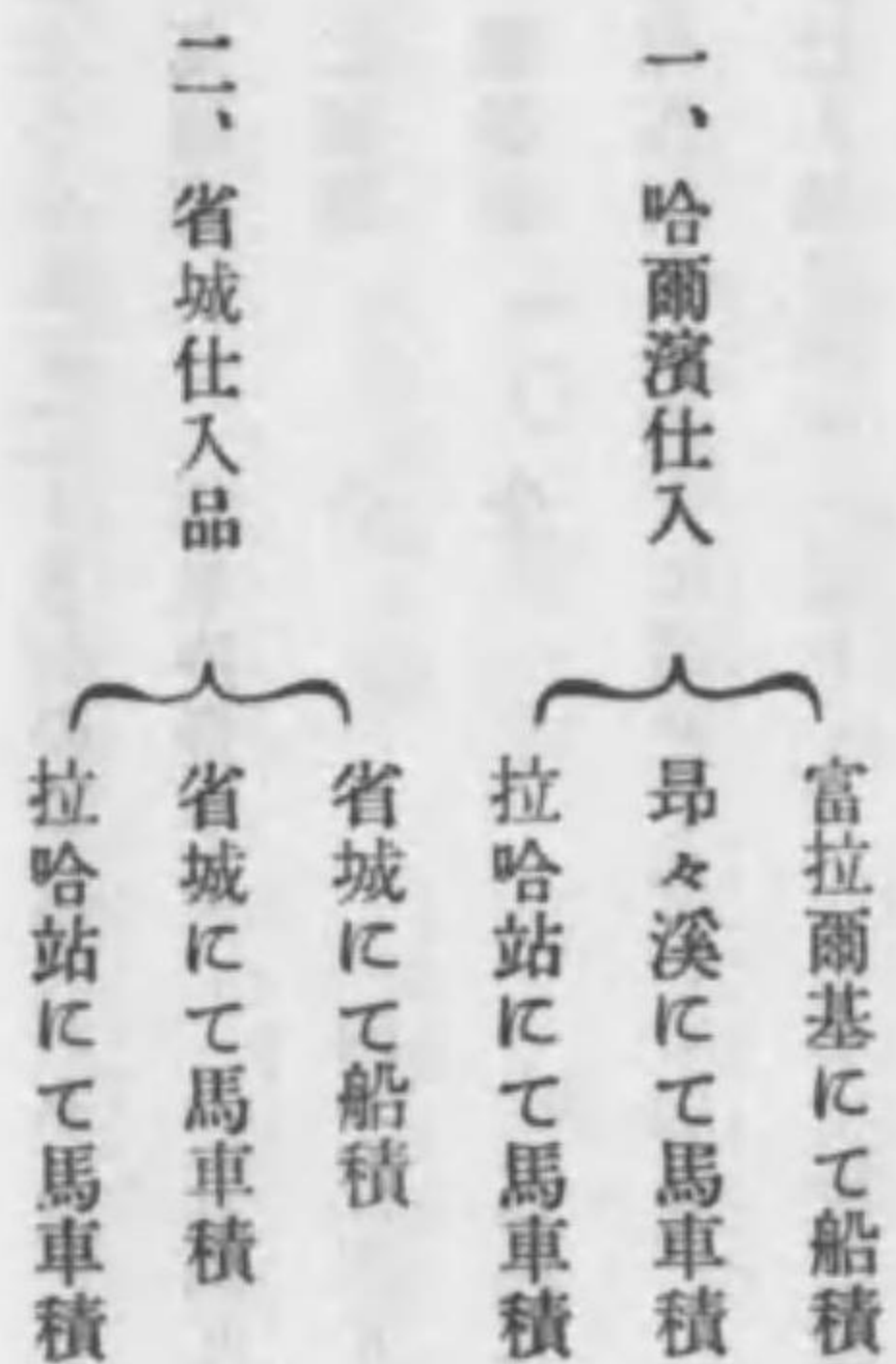
### 一一、布西縣城



布西縣城は訥河縣城の西約七〇支里、嫩江本流を去る約二支里の西方高地に位置し、拉哈站に至る南へ七〇支里、市街は城壁、城濠を有しない。人家は江西岸から不規則に連続して市街中心に至つて居る。附近一帯を合して人家約七、八〇戸、人口約八〇〇内外である。

市中にはデパート式の雜貨商なく、凡て八百屋式である。其の數約一〇戸に達し、慶豐源、祥合順、公順長等最も大きく、商品は主として哈爾濱より仕入れ、従として省城仕入れを行つて居る。其他は概ね訥河縣城商家の支店であつて、訥河より供給を受けて居る。

哈爾濱及省城仕入品の輸送経路は左の如くである。



### 一二、甘南縣城

甘南縣城は省城の西北一四〇支里、富拉爾基に至る約一八〇支里の地点に在り、市街は五年來の發展に係り、市中に主なる雜貨商約二十五あつて夫々商品を、白綿布、鐵器等は哈爾濱より、其の他の日用品諸雜貨等は哈爾濱省城等から半々に仕入れ。

#### 一、哈市仕入のものは

省城にて馬車積或は自動車積

富拉爾基にて馬車積

#### 二、省城仕入れのものは省城にて馬車積又は自動車積

の方法に依つて當地に運送して居るが一昨年の收穫不良、官吊下落同業者過多等の諸原因の爲めに一般に不況に悩んで居る。

### 一三、東陽鎮

甘南縣城を去る一四〇支里、省城を距る一七〇支里の地点に在り、市中に約一七戸の雜貨商がある、商家の數より言へば甘南縣城のそれに及ばないが、商家個々の規模は甘南のそれより廣大で、市中の東昌盛、保順長の如きは店員三〇人乃至四〇人を有し、間口八間乃至十間、雜

貨部の開業のみにも大洋二万元乃至三万元を要する。商品の仕入地は主として哈爾濱で輸送経路は。

一、結水中

省城より馬車  
昂々溪より馬車

二、解氷後

省城及昂々溪より馬車  
富拉爾基より河船

等によつて居る。

將來の豫想は當地方開墾の進捗如何に係つて居るが寧訥鐵道開通後は或は農民需要の幾部分を拉哈站に奪はるるに至るやも計り難い。

一四、結

言

既に述べたる通り各地商家の仕入れは省城よりも哈爾濱に向はんとする傾向漸次に濃厚となつて來たが、我國商人として當背後地に我國商品を賣り廣める爲めには、

一、日本商家を背後地に進出せしめるか

二、主たる仕入地哈爾濱に日本品の輸入を盛んならしむること

の二途に出ない。而して(一)の場合は言ふべくして實行致し難しとすれば第二の方法によるより他に仕方がない。其の理由は奥地に入る輸入品の経路は數方面に分れて居るとは云ふもの結局哈爾濱が根源を爲すが故である。即左の如くである。

昂々溪  
齊々哈爾省城  
哈爾濱仕入品  
小蒿子一林甸、依安  
安達一拜泉、二克山、北興鎮、德都鎮

更に日本商人としては。

(一)從來賣行良き商品たる綿布、雜貨其他の改良怠りなく、他國品との競争に優位を占めつつ進み

(二)背後地の生活程度低き爲め現在の需要微々たるも將來ある製品、即。

硝子器具、アルミ器具、エナメル器具、電燈材料、玩具、男女帽子、敷布、毛織物(支那服用)、セルロイド製品。

等に着目し。

(三)外國品(支那品をも含む)と競争し、割込の余地あるもの即

化粧品、靴下、タオル、巻煙草、マツチ、罐詰類、皮革製品、時計類

等に着目して努力して行くことが必要である

以上

### 齊克鐵道及沿線事情 下編終

## 哈爾濱商品陳列館發刊パンフレット目錄

號數	書名	號數	書名
一	東三省特別區市内、郷、自治、暫定規則並施行令 (缺)	一四	露國の亞麻と北滿洲の亞麻栽培研究 (缺)
二	北滿特産と日本特産商の現状 (全)	一五	(一)ソウエート、憲法史の梗概 (同)
三	滿洲里、海拉爾事情 (全)		(二)金融上より見たる東鐵附屬地土地建物の權利關係 (缺)
四	勞農露西亞の國家制度(上) (全)	一六	(一)ソウエートの最高裁判 (全)
五	全 (下) (全)		(二)ソウエート機關の概要 (全)
六	勞農露國の對外貿易規則集(上) (全)	一七	勞農露國に於ける取引契約 (全)
七	北滿洲の工業概観 (全)	一八	(一)村落、郷ソウエート機關の概要 (全)
八	勞農露國の對外貿易規則集(下) (全)		(二)勞農當局の説明せる同國の現状 (全)
九	現行勞農商業法規概説 (全)	一九	(一)同縣州内國貿易部に關する規定 (缺)
一〇	現行勞農企業法規概説 (全)		(二)勞農労働組合法規 (全)
一一	西伯利經濟事情(上) (缺)		(三)ソウエート内に於て外國人が (全)
一二	同 (下) (全)		
一三	北滿地方の阿片 (全)		

二〇	商業に従事する規定	(缺)
二〇	包装の研究	(同)
二一	ウクライナ共和国の概況	(同)
二二	北滿地方の阿片	(下)
二三	北滿に於ける露人及外人關係事業	(缺)
二四	露領極東大觀(一)	(同)
二五	全	(二)
二六	入露の指針	(同)
號外	臺灣の旅	(缺)
二七	(一)勞農露國內異種民族共和國の近況	(同)
二八	(二)勞農露國及極東購買組合成績	(同)
二九	露領極東大觀(三)	(同)
三〇	哈爾濱に於ける列國の經濟勢力上	(缺)
三一	全	(下)
三一	露人の見たる太平洋問題解決の道程	(同)
三一	(一)	(缺)
三二	東支沿線指南(上)	(同)
三三	勞農露國々立極東及極東農業銀行	(同)
三四	定款	(同)
三五	露人の見たる太平洋問題解決の道程(一)	(同)
三六	露領極東概觀	(同)
三七	露人の見たる太平洋問題解決の道程(三)	(同)
三八	東支沿線指南(中)	(缺)
三九	露人の見たる太平洋問題解決の道程(四)	(同)
四〇	沿海縣事情(上編)	(同)
四一	一九二五年一二六年度ソウエート國民經濟豫想	(同)
四二	大正十四年度勞農露國	(同)
四三	沿海縣事情(中編)	(同)
四四	同	(後編)
四五	ソウエート聯邦對外貿易銀行定款	(缺)
四五	極東經濟問題中に現れた東支鐵道	(同)
	(上編)	(同)

四六	同	(下編)
四七	公報より見たるソウエート聯邦經濟狀態	(同)
四八	ソウエート對外獨占とネーフ	(同)
四九	計畫的經濟と外國貿易獨占	(同)
五〇	ソウエート極東の教育	(同)
五一	ソウエート國營工業	(同)
五二	(一)ソウエート一九二五年度の經濟政策	(同)
	(二)ソウエート工業管理に職業同盟參加	(同)
五三	ソウエート利權政策の新傾向	(同)
五四	經濟上より見たる勞農露西亞	(同)
五五	極東地方金融制度	(同)
五六	ソウエート聯邦法規概要(上)	(同)
五七	勞農露西亞の財産權	(同)
五八	ソウエート聯邦法規概要(下)	(同)
五九	ソウエート聯邦に於ける密輸	(缺)
六〇	ソウエート聯邦に於ける外國貿易	(一)(缺)
六一	同	(二)(同)
六二	東支沿線指南 下編(乾)	(全)
六三	同	(同)
六四	同	(坤)
六四	ソウエート聯邦に於ける經濟事情	(全)
六五	ソウエート聯邦と共和國並に共產黨と猶太人	(全)
六六	ソウエート文化施設外國人の權利義務私有財産及相續財産	(同)
六七	西伯利地方極東地方並ヤクイトスクフリヤトモンゴリ社會主義ソウエート自治共和國	(同)
六八	ソウエート聯邦利權法(上編)	(同)
六九	同	(下編)
七〇	ソウエート聯邦に於ける輸出貿易の期節性	(同)
七一	ソウエート極東地方の諸統計	(同)

七二	洮昂及四洮鐵道案内	八九	ロシヤ雜觀(上篇)	(缺)
七三	一九二六年度蘇國の外國貿易と日蘇貿易	九〇	同(下篇)	(缺)
七四	支那領烏蘇里沿岸事情	九一	松花江の航運	
七五	ヤクーツク共和國(上卷)	九二	極東の水田	
七六	ヤクーツク共和國(下卷)	九三	ソウエート聯邦概覽	
七七	最近に於ける蘇聯邦の國民經濟一般	九四	北滿に於ける輸入商品(その一)	
七八	極東經濟及び文化的施設に對する各委員の報告概要	九五	蘇聯邦極東産業計畫	
八〇	極東殖民主史	九六	極東沿海地方の諸企業(上卷)	
八一	松花江沿岸事情	九七	同(下卷)	
八二	北滿の移民	九八	北滿に於ける輸入商品(その二)	
八三	沿海縣の水田	九九	現行外國利權及國民經濟に及ぼす影響	
八四	ソウエート共和國土地法典(前編)	一〇〇	旅大並に南滿東支鐵道附屬地とその隣接地帯に於ける支那人の經濟的勢力(缺)	
八五	同(後編)	一〇一	蘇聯邦の課税と反幹部派	
八六	露支東部國境の密輸事情	一〇二	東支鐵道沿線牧畜狀態及同鐵道の對策並に沿海縣北滿の米作	
八七	呼海鐵路並に沿線事情	一〇三	ソウエート聯邦における原料貯藏高	
八八	吉拉林及三河地方事情	一〇四	吉林省中部各縣事情	(上卷)

一〇五	同(下卷)	一一一	最近の浦鹽斯德港	(缺)
一〇六	ソ聯邦の大資本施設(上卷)	一一二	東支鐵道西部沿線事情	
一〇七	同(下卷)	一一三	烏蘇里地方に於ける朝鮮人	
一〇八	昭和三年哈爾濱市況	一一四	東支鐵道問題の真相と其經過(上)(缺)	
一〇九	傅家甸に於ける工業	一一五	同(下)(同)	
一一〇	蘇聯邦の國營保險	一二六	東支鐵道西部沿線事情(下)	(缺)
一一一	北滿に於ける輸入商品(その三)	一二七	傅家甸の商工一覽	(缺)
一一二	哈爾濱に於ける商工組合其他規定集(上)	一二八	フリヤートモンゴリヤ社會主義ソウエート自治共和國事情(上)	
一一三	蘇聯の失業と其對策	一二九	同(下)	
一一四	哈爾濱に於ける商工組合其他規定集(下)	一三〇	最近西伯利産業の發達に就て(上)	
一一五	松花江の航運附黑龍江航運の使命	一三一	同(下)(缺)	
一一六	極東露領の殖民	一三二	昭和四年哈爾濱市況	
一一七	東支鐵道南部沿線事情	一三三	北滿大豆豆粕及豆油の輸出組織	(缺)
一一八	極東露領視察記(一)	一三四	西伯利地方の鑛産	(上)
一一九	同(二)	一三五	同(下)	
一二〇	極東露領移民用地の概要	一三六	東支鐵道東部沿線事情	(上)
		一三七	洮昂、四洮及打通鐵道一般經濟事情上	

- 一三八 同 (下)
- 一三九 瀋海、吉海鐵道沿線事情 (缺)
- 一四〇 獨逸輸出貿易出張員を顧みて
- 一四一 呼海鐵道と其沿線特産事情 (缺)
- 一四二 北滿鮮人農村概況
- 一四三 蘇聯邦の内外商業及工業に對する批判 (上)
- 一四四 同 (下)
- 一四五 露西亞共和國コルホズ(共同農業)に就て
- 一四六 蘇聯邦ソフホズの研究 (上)
- 一四七 齊克鐵道及沿線事情 (上)
- 一四八 東支鐵道東部沿線事情 (中)
- 一四九 蘇聯邦ソフホズの研究 (下)
- 一五〇 北滿に於ける日本商品の劣勢なるもの  
に關する調査 (上) (缺)
- 一五一 世界的不況と其極東及滿洲市場に及ぼしたる反影

終

